自らの命を守り抜くため「主体的に行動する児童」の育成

御宿町立御宿小学校

Ⅰ　本校の概要

本校がある御宿町は、房総半島の東部に位置し、年間を通じて温暖な気候に恵まれている。海岸線は約２ｋｍに渡って真っ白な砂浜が広がり、毎年多くの観光客が訪れる。学校周辺には穏やかな清水川が流れ、屋上からは遠浅で漁獲量豊富な網代湾が見える。

しかし、１７０３年１２月に発生した元禄地震では、巨大な津波に襲われ、甚大な被害を受けている。本校は海岸から約６００ｍ、海抜４.５ｍに位置しており、大地震・大津波が発生した場合、東日本大震災と同等の被害に見舞われる可能性が高い。今後、房総沖や南海トラフ沿いでの地震による津波被害が懸念されている中、地震・津波への備えが喫緊の課題である。

Ⅱ　主題設定の理由

児童が必要な知識や能力を身に付け、地震や津波から自らの命を守ることができるようにするには発達段階に応じた系統的な指導が必要である。本校では、平成２５年度より『自らの命を守り抜くため「主体的に行動する」児童の育成』を研究主題として防災教育を推進してきた。その結果、児童一人一人が地震・津波災害は身近なものであることを認識し、いつでも、どこにいても素早く避難行動をとることの大切さを実感することができた。そこで、今年度は、児童一人一人が自ら考え判断し、主体的に行動する態度の育成をめざし、いろいろな場を想定した避難訓練や各学年の実態に即した防災授業の工夫改善を図る中から、地震・津波発生のメカニズムや防災の基本的な知識を身に付けさせ、迅速かつ的確な判断ができるようにさせたいと考えた。さらに、地域全体の防災意識を高めるため、児童自らが発信者となり、地域の方や保護者に防災の必要性を呼びかけたり、地域の防災活動に積極的に関わったりすることで、将来自ら進んで安全で安心な社会づくりに貢献できるような資質や能力を養いたいと考え、本研究に取り組むこととした。

Ⅲ　研究目標

１　地震や津波に関する理解を深め、状況に応じた的確な判断のもとに、自らの安全を確保するための行動がとれる児童を育成する。

２　様々な防災活動を通して児童・保護者・地域の防災意識を高める。

Ⅳ　研究の内容

１　命を守る防災授業をはじめ、学校における防災活動の公開

２　児童の主体的な活動を取り入れた防災教育の取組

３　保護者・地域住民・教職員等を対象とした講演会等の防災啓発活動

４　学校・保護者・地域住民・関係機関の参加による合同避難訓練の実施

Ⅴ　研究の概要

１　実践

（１）命を守る防災授業をはじめ、学校における防災活動の公開

①　防災授業

ア　第１学年「つなみがくるぞ」

津波の恐ろしさを理解し、津波から身を守るための行動を考えられるように授業を実施した。最初に、津波の恐ろしさを身近に感じられるように、スズランテープとブルーシートで作った津波模型で、５ｍの高さの津波を体感させた。また、避難場所の高さを図に表して説明することで、「すぐにげる」「ひとりでもにげる」「たかいところににげる」の３つの約束の大切さを知ることができた。

【津波模型を見る児童】

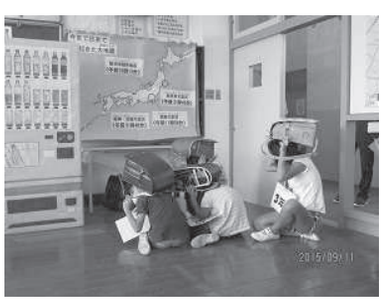
イ　第２学年「つなみからにげる」

自宅に一人でいた時に地震・津波が起こった場合の避難方法を考えた。児童は家族と避難場所まで歩いた経験を振り返ったり、津波の映像を見たりすることで、地震・津波は身近に起こる災害であること、また、津波は恐ろしいけれど、正しい避難の仕方を学べば安全に逃げられることを学んだ。授業後、家族と避難の仕方を話し合った児童も多く見られた。

【津波クイズの様子】

ウ　第３学年「下校中に大地震がおきたら」

低学年と一緒の集団下校途中に大地震や津波が発生した際に、素早い避難行動がとれるように授業を行った。周囲の状況を正しく判断することや適切な避難方法を考えるため、役割演技を取り入れた。児童は危機感をもって、適切な避難方法や声かけの大切さを考えることができた。



【役割演技の様子】

エ　第４学年「学校が休みの日に大地震が起きたら」

学校や家庭以外の場所で災害が発生した状況を想定して授業を実施した。過去に御宿町を襲った元禄地震の津波について調べ、被害範囲と現在の地図を重ね合わせ、具体的な場面想定ができるようにし、避難の仕方を考えさせた。そのため、一人でも避難する意識が高まり津波避難の約束が身近で活用できるものになった。

【セロファンで表した津波被害】

カ　第５学年「津波から命を守る」

御宿町の地形や津波到達時間をもとにして、津波から逃げる最善の方法を判断し、避難場所を考えられるように授業を展開した。最初に、津波のメカニズムや元禄地震の被害等についてゲストティーチャーから話を聞いた。そして、御宿町の地形や津波到達時間を手がかりにして、最も安全な避難場所や避難経路を話し合うことで一人でも落ち着いて行動し、到達時間を考えてより高く、より遠くに避難することの大切さを学んだ。

【ゲストティーチャーの話】

キ　第６学年「大地震発生時　どんな場所にいても」

大津波警報発令時に店の中や町営プール等にいた場合を想定し、周囲の状況を考え、自ら判断し避難行動をとろうとする態度を養うために取り組んだ。児童は、石巻市の地形と御宿町の地形を比べることやＮＡＳＡシミュレーションの津波被害予想をもとにして考えることで、自ら判断し行動することの大切さを確認できた。また、周囲への声かけの重要性にも気付き、共助の意識ももたせることができた。

【グループでの話し合い】

ク　第６学年「命を守るために」

「浮いて待つ」姿勢や救助体験から、よりよい身の安全の守り方・助ける手立てについて考えられるように取り組んだ。

外部講師に質問したり、アドバイスをもらったりしながら何度も試みることで浮く姿勢をとることができた。また、水の事故は、一人一人が正しい知識をもっていれば防ぐことができることを理解するとともに、浮力体を使った救助体験を通して命の大切さを改めて感じることができた。

【救助体験】

ケ　特別支援学級「あたりまえ防災をおぼえよう」

特別支援学級の児童が、「自ら考え、判断し、行動できる」ようにするためには、繰り返し訓練をし、「体で覚えること」が大切である。そこで、避難の際に必要なことを「あたりまえ防災」の歌と踊りで覚えられるように取り組んだ。見て、聞いて覚えるだけでなく、歌いながら動作を何度も繰り返していくことで避難の仕方を体で覚えることができた。また、防災カルタを使い防災に対する知識を学んだ。

【地震の時にはダンゴムシ】

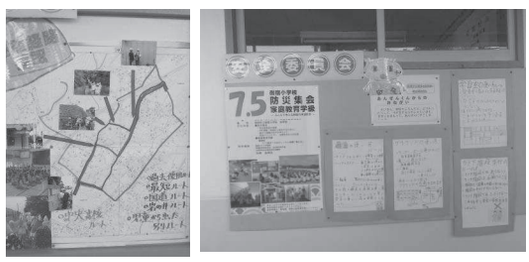
（２）児童の主体的な活動を取り入れた防災教育の取組

①　安全委員会の取組

児童の主体的な活動を通して、安全や防災への意識を高めることをめざし、今年度より安全委員会を新設した。初代安全委員会メンバーの８名は、全校児童の安全のためにできる活動を話し合い、次のように取り組んだ。

ア　安全のためのルールづくりや注意喚起

校内の危険箇所やライフジャケットの保管方法、御宿中学校への避難経路の様子について調べ、安全コーナーに掲示したり、校内放送や教室に出向いて、全校に知らせたりする等主体的に活動した。



【安全委員会掲示コーナー】

イ　その他の活動

安全委員会を中心に安全標語を募集し、校舎内に掲示するとともに、放送により周知し、全校児童に注意喚起した。

②　下校時の避難訓練

登下校時に地震が発生した場合、どこにいても安全な避難行動がとれるように登校班ごとに通学路の危険箇所、安全な場所について話し合った。その後、集団下校を行い、実際に倒れてきそうなブロック塀や空屋、川の位置を確認することで、危険箇所の多さに気が付くとともに、避難場所までの経路を見直す良い機会となった。

【大地震発生！広い場所で頭を守る】

【川から津波が迫ってくるかも】

③　地域の危険箇所の確認

地震津波の際に身を守る行動ができるよう、地域の危険箇所や安全に避難できる場所をフィールドワークをして確認した。児童は主体的に危険箇所を見つけ、避難経路についての考えを深めていった。また、津波避難に関する標識にも目を向け、避難の仕方についても考えることができた。

④　避難経路確認

大津波警報が発令された場合に避難する御宿中学校までの避難ルートについて考え、どのルートがすばやく安全に避難することができるかを実際に歩いて確認した。

⑤　防災集会「みんなで考える御宿の津波防災」

保護者、地域の方々と一緒に御宿の津波防災について考えるために防災集会を実施した。ポスターや防災無線で広く参加を呼びかけたところ、保護者１３２名、町長をはじめとする町関係者、町議会議員、教育委員会関係者、区長、保育所職員、地域の方々が多数参加した。

ア　安全委員会の発表

(ｱ) 御宿小学校の防災活動の実践発表

避難訓練、保育所との合同避難訓練、起震車体験等、実践してきた防災活動について発表した。

(ｲ) 考えよう、御宿町の津波防災

東日本大震災で大きな津波被害を受けた石巻市と御宿町の地形を比較し、地形がよく似ていることや御宿町に大津波がきた場合、石巻市と同様の被害が想定されることをみんなで考えた。さらに、ＮＡＳＡシミュレーションを使って５ｍ、９ｍ、１３ｍの津波が押し寄せる範囲を確認し、津波から命を守るためには状況を的確に判断し、より高い場所へ逃げることの重要性を参加者全員で共有することができた。

(ｳ) ＤＶＤ「まもるいのち、広める防災」を視聴する。

日本赤十字社が作成したＤＶＤを視聴し、地震、津波発生のメカニズムや災害がもたらす被害状況、避難の仕方などを学んだ。

(ｴ) 避難のやくそくを確かめる。

「あたりまえ防災」を紹介し、曲に合わせみんなで体を動かしながら、津波から避難する時の大切な約束について確認した。

(ｵ) 親子で「津波避難」について考える

登校班ごとに集まり、親子で避難場所や避難の仕方、安否確認の方法について話し合った。また、日頃から家庭で話し合っていることや、心配に思うことなどについて活発に意見交換がなされた。保護者アンケートの中から課題となっていた災害時に家族が離れて避難した場合の連絡方法についても、様々な意見が出された。

【親子での真剣な話し合い】

（３）保護者・地域住民・教職員を対象とした講演会等の防災啓発活動

①　地域懇談会（講演・懇談会）

ア　演　題　「いつ起きてもおかしくない地震に備える」

イ　講　師　鎌倉女子大学講師　板橋区教育委員会安全教育専門員
　　矢崎　良明　氏

ウ　参加者　保護者、町長、町議会議員、民生児童委員、老人クラブ
　　地域住民、教育委員会、役場関係者、保育所関係者

エ　矢崎良明先生のお話

【講師　矢崎良明先生】

日本国土領域は全世界のわずか０.２５％であるが、世界で発生するＭ６以上の地震の約２０％が日本で起きている。日本は世界有数の地震多発国であり、防災教育は極めて重要である。地震や津波のメカニズムを理解する事は災害から身を守るうえで不可欠である。例えば、突き上げる地震は震源地が近く危険であることや、小さい揺れから大きい揺れになるときには震源地が遠いことなどを知っていれば、津波から身を守るためにどのような避難行動をとればよいか的確に判断することができる。元禄時代の地震では、御宿町で津波被害があったが、関東大震災では津波は発生しなかった。これも、地震の起きるメカニズムの違いによるものである。今後直下型の地震が起こる可能性がある。

地震・津波の知識を身に付け、災害から身を守れるようになることが大事である。地震はいつどこで発生するかわからない。地震発生時には「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」を合言葉に、安全なところに素早く避難することが大切。今自分がいる場所をよく見て、「どこが安全なのか」を常に意識することで、あわてず迅速に避難行動をとれるようになる。天井は耐震基準がないので、落下する可能性があることを理解し、行動できるようにする。

学校では、様々な時間、場所で緊急地震速報の報知音による訓練を行うことが大切である。このような訓練を積み重ねることで、瞬時に状況判断をする力を養い、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」安全な場所に身をよせることができるようにしておく。避難訓練が実践に即した内容であることが大事である。子供が学校で地震にあう確率は、２０％。８０％は家庭や地域で発生する。まず、自分の家の海抜が何ｍなのかを知ってほしい。避難場所に行くことだ

けを考えるのではなく、自分の家が安全な避難場所になることも含めて、状況に応じた適切な判断ができるようにすることが重要である。そのためには家庭でも、日頃から地震に対する備えをしておくことが大事である。また、昭和５７年以前の建物は、耐震基準がないので注意しなくてならない。常に防災意識をもって、家族で話し合うことが大切である。

オ　質疑・応答

参加者は皆、熱心に矢崎先生の講演に聞き入っていた。講演終了後、保護者からたくさんの質問が出され、矢崎先生に丁寧に回答していただいた。

Ｑ　命を守るということは、低学年ではどこまで理解しているのか？

Ａ　低学年で十分理解するのは難しいです。大人が守らなければなりません。ただ、避難の仕方について、子供とよく話し合う必要はあります。

Ｑ　災害伝言ダイヤルは、大災害のときに本当につながりますか？

Ａ　月に１回テストしているので大丈夫です。

Ｑ　町の指定する避難場所は、安全ですか？遠い場所に避難するより、近くのマンションに行った方がよいのでしょうか？

Ａ　避難場所は、本人がよいと思うところでよいのです。避難場所に指定してあるマンションは、耐震性を考慮したうえで指定されているので安心です。御宿町の防災マップは最悪を想定して作成されています。

カ　参加した方々の感想

今まで災害について深刻に考えていませんでしたが、矢崎先生の話を聞いて、家族内で避難の仕方をよく話し合う必要があるとわかりました。地震の起き方によって、すぐに逃げなくても、自宅でも大丈夫な時もあることも知りました。

子供は、学校では先生と、家庭では大人と一緒にいますが、成長するにしたがって子供だけの時間が増えると思います。地震から自分の身を守る方法を、家族で考えることの大切さを改めて感じました。

ハザードマップもよいと思いますが、地図上ではなかなか難しいようです。実際に電柱に色のテープを貼ることで、海抜何メートルか子供の目でもわかるような簡単にわかる御宿町であるように願います。

子供が家で一人で過ごす時があります。家の中での安全な場所を親子で確認したいと思いました。家庭でも「落ちてこない。倒れてこない。移動してこない。」を合言葉にしようと思います。地震の基礎的な知識を得ることがき、防災意識が高まりました。再度、ハザードマップを確認したいと思います。子供のランドセルに笛と懐中電灯を入れておこうかと考えています。

地震のメカニズムを知ることができて、それが自分たちの身を守ることに繋がっていくことが分かりました。自分で危険回避ができるよう、家庭でも防災について話し合い、実践していきたいと思いました。

講師の先生の説明がわかりやすく良かったと思います。東日本大震災から４年。自分の中でもだんだん薄れていく記憶を呼び起こすよい機会になりました。

（４）学校・保護者・地域住民・関係機関の参加による合同避難訓練

①　３校合同避難訓練

ア　目標

(ｱ) 地震によって起こる危険や避難の仕方について理解させ、安全な行動がとれるようにする。

(ｲ) 地震による津波を想定し、安全第一で状況に応じた適切な行動がとれるようにする。

地震発生	平成２７年７月１４日　午前７時３０分
震源地及び規模	千葉県東方沖を震源とするＭ８．０の地震 震度６強の揺れ
地震発生３分後	大津波警報発令（千葉県九十九里・外房地区・内房地区） 大津波の到達予想時刻（午前８時００分）

イ　活動の様子

(ｱ) 事前指導

６月１日、地区児童会で避難場所を確認後、各登校班ごとに児童・教職員で通学路を実際に歩き、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所を判断し、どこへ避難するのが最善であるか等を確認した。また、７月５日に行われた防災集会で、同じ登校班の保護者・児童が集まり、避難場所を確認し、７月１０日の地区児童会で再確認を行った。

(ｲ) 初期避難

午前７時３０分大地震が発生。その場で初期避難行動をとり、班員全員の安全を確認する。地震の大きさから津波の恐れがあることを想定し、第一次避難を開始する。自宅にいた児童は、自宅で初期避難を行った。

【初期避難の様子】

その後、大津波警報が発令され、児童は安全が確保できる一番近い避難場所へ急いだ。児童が避難する際、交通事故等にあわないよう消防署や地元消防団、地域の方々も率先して協力してくれた。

【第一次避難の様子】

(ｳ) 第一避難完了

児童は、安全が確保できる一番近い避難場所へ移動した。移動後すぐに地区担当職員が児童の安否確認をし、避難状況を本部に伝えた。その後、避難場所で大津波警報解除の放送があるまで静かに待機した。

(ｴ) 避難訓練終了後

職員は、各避難場所から児童を見守りながら学校まで引率した。学校到着後は、地区児童会を行い、今回の避難訓練について話し合った。その中で、その時の状況を的確に判断し、安全が確保できる一番近い避難場所に一人でも避難することが重要であることも確認した。

【避難所での様子】

②　御宿町総合防災訓練への参加

ア　目的

(ｱ) 防災機関や地域住民と一体となって総合的かつ実践的な訓練に参加する中から、地震、津波から身を守るための避難方法を理解し、迅速かつ的確な避難ができるようにする。

(ｲ) 御宿町総合防災訓練に参加する中から、自分の命は自分で守る意識を持つことができるようにする。

地震発生	平成２７年９月６日　午前８時００分
震源地及び規模	千葉県東方沖を震源とするＭ６．8の地震 震度６弱の揺れ
地震発生３分後	大津波警報発令（千葉県九十九里・外房地区）
	大津波の到達予想時刻（午前８時１５分）　予想津波高８ｍ
参加者	児童（１９０名）　職員（２１名）　町関係者（１８７名）
	教育委員会（５名）　保護者（３０名）　地域住民（１７８名）

イ　活動の様子

(ｱ) 初期避難・第一次避難

午前８時００分に大地震が発生。児童は登校直後であったが速やかな初期避難ができた。その後、ライフジャケットを持ってグラウンドに避難した。避難終了後直ちにライフジャケットを身に付けた。

【第一次避難】

(ｲ) 第二次避難（御宿中学校に向かって避難）

午前８時３分、大津波警報が発令されたため、御宿中学校に向けて避難を開始する。大津波が午前８時１５分に到達する予想になっているため、駆け足で最短ルートを使って避難した。途中、駆けつけた消防団のみなさんに見守られながら御宿中学校に向かった。児童は、互いに「もう少しだよ、がんばれ」「気を付けて」などと声をかけながら、汗びっしょりになって走り、約１５分で全員が避難所に到着した。

【第二次避難】

児童は、到着後、御宿中学校に避難してきた地域のみなさんと一緒に、町長、消防団長から町の防災対策や緊急避難時の助け合い、支え合いの大切さなどの話を真剣に聞いた。

【話を聞く児童】

(ｳ) 防災体験

応急処置、煙体験、起震車による大地震体験、放水体験、消火体験など全校児童が各場所に分かれて多くの体験をした。また、自衛隊の方々の協力による炊き出し訓練も行われ、非常食となるカレーもいただいた。児童は防災体験から多くのことを学び、いざという時に向けて、防災意識を高めることができた。

【炊き出し訓練】

Ⅵ　成果と課題

1　成果

①　各学年の発達段階に即した防災授業を系統的に位置付け実践したことにより、大地震や津波への知識を身に付け、自分の命を守るために主体的に考え、判断し、行動しようとする意識が高まった。また、過去に地域で起こった災害を知ることで、自分たちが住む地域の避難場所や避難経路を進んで確認したり、考えたりすることができるようになった。一人一人の防災に対する意識の高まりにより、いざというときに「自分の命は自分で守る」という態度が随所で見られるようになってきた。

②　緊急地震速報を活用し、休み時間、登校時、掃除の時間など様々な場面を想定した避難訓練や、起震車体験などの体験活動を積み重ねることで、基本的な避難行動をしっかりと身に付けることができた。また、様々な場面で地震が起きた場合の危険を予測し、自らの命を守るための的確な避難行動を考えることができた。

③　安全委員会を中心とした啓発活動により､児童自らが身の回りの安全に気を配り、安全な生活づくりに向けて主体的に活動するようになってきた。また、毎回避難訓練後に自己評価を行うことで自分の行動を振り返り、次回の防災訓練に生かそうとする姿が見られるようになった。

④　児童が主体となって防災集会を開き、保護者や地域に向けて津波防災の大切さを発信したり、児童、保護者、地域の方々が一緒になり、防災について話し合う場を設けたりしたことは、地域全体の防災意識の高揚につながった。

⑤　学校防災アドバイザーの矢崎先生より地震・津波発生のメカニズムや日頃の備えのあり方、適切な避難方法について指導・助言をいただき、これまでの防災教育活動をより実効性のある活動として再構築することができた。

⑥　保護者、地域の方を対象に行った講演会は、専門的な立場の矢崎先生から、防災について数々の貴重な話を聞くことができ、大変有意義な会となった。多くの保護者、地域の方々が地震・津波発生のメカニズムや防災の知識を高め、日常的な備えの必要性を実感することができた。

2　課題

①　地震や津波の怖さ、災害の起こり方、危険の予測について理解を深めるとともに、「いつ、どこにいても」災害から身を守るための学習や訓練を繰り返し実践していくことが必要である。

②　今後も、児童の目線ならではの気付きを大切にし、常時活動や安全啓発活動に取り組んでいくことが重要である。

③　自らの命を守るための自助の力だけでなく、災害が起きた際に他の人と協力し合って命を守る共助の考え方についても学んでいけるよう、防災教育活動に工夫改善を図る必要がある。

④　今後も高めてきた防災意識を継続し、広げていけるよう、家庭・地域・関係諸機関との連携をさらに強化していく必要がある。